

令和8年産水稻の作況調査結果と当面の技術対策

米麦畜産課 農産振興室

生育ステージ	早 期：収穫終了 早 植：収穫期～収穫終了 普通期：黄熟期～収穫期
生育概況	早 期：「コシヒカリ」の成熟期は平年より2日程度遅れた。収量は地域差が大きい、平年並～やや多い。品質は穂発芽、青未熟粒が発生し、平年よりやや劣る。 早 植：「コシヒカリ」「ひとめぼれ」の成熟期は平年より2～7日程度遅れ、「あさひの夢」も同程度遅れている。収量は平年並～やや少なく、品質は平年並～やや劣る見込み。 普通期：「あさひの夢」の生育は平年より3～5日程度遅れており、収穫作業も遅れている。収量は平年並～やや少なく、品質は平年並～やや劣る見込み。

1 気象経過（前橋地方気象台の気象データ、10月は第3半旬までのデータ、参考資料参照）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
気 温(平年差)	+2.3℃	+1.7℃	+0.0℃	+1.6℃	-0.2℃	-0.2℃	+1.7℃
降 水 量(平年比)	110%	54%	187%	103%	161%	138%	2%
日照時間（平年比）	89%	124%	94%	111%	87%	39%	164%

2 生育概況

(1) 概要

ア 早期・早植栽培（6月15日以前の田植）

早期栽培の「コシヒカリ」の成熟期は、平年より2日程度遅れた。収穫は終了しており、収量は地域差が大きいものの平年並からやや多い。品質は穂発芽や青未熟粒の発生により、平年よりやや劣った。

早植栽培の「コシヒカリ」及び「ひとめぼれ」の成熟期は平年より2～7日程度遅れ、「あさひの夢」についても同程度遅れた。一方、中山間地では平年より3日程度早まった。収穫はおおむね終了しているが、地域によっては収穫期を迎えているほ場もみられる。作況ほの暫定値では穂数は平年並、穂重は平年よりやや少ない。降雨による倒伏や刈遅れの発生がみられた。収量は平年並からやや少なく、作柄はやや不良から平年並となる見込みである。

イ 普通期栽培（6月16日以降の田植）

「あさひの夢」の生育は平年より3～5日程度遅れており、黄熟期から収穫期となっている。収穫作業についても平年より遅れている。作況ほの暫定値では穂数は平年より多く、穂重は平年並の傾向にあるものの、登熟不良の影響により作柄はやや不良から平年並となる見込みである。

(2) 病害虫・障害等の発生状況

いもち病、紋枯病、内穎褐変病、稲こうじ病の発生が平年より多くみられた。特に生育後半には穂いもち病が散見された。また、斑点米カメムシ類の発生も確認され、品質低下が懸念される。曇雨天の影響で登熟不良がみられ、一部ほ場では倒伏や刈遅れによる胴割粒、穂発芽の発生が懸念される。近年発生が多かったイネカメムシは発生が少なかった。

収穫済みの早期・早植栽培では、登熟不良による青未熟粒や収穫遅延に伴う胴割粒、穂発芽の発生がみられ、品質は平年よりやや劣る見込み。

(3) 作況ほ等の調査結果等

ア 作況ほの調査結果（表 1 参照）

県平均の出穂期は 8 月 16 日（平均比＋3 日）であった。出穂後 30 日の穂重は 682g/m²（同 97%）であった。早期・早植栽培の成熟期は 9 月 25 日（同＋5 日）、普通期栽培の成熟期は 10 月 11 日（同＋5 日）であったが、多くの調査地点で成熟期に達していない。

イ 農業技術センターの生育基本調査結果

稲麦研究センター（6 月 23 日移植）

「あさひの夢」の出穂期は 8 月 30 日（過去 10 カ年平均比±0 日）、成熟期は 10 月 15 日（同－1 日）、稈長は 76cm（同 100%）、穂長は 20.3cm（同 98%）、穂数は 304 本/m²（同 79%）であった。

表 1 水稻作況ほ調査結果（地域別・作期別）（ ）内は平年比

調査項目 地区	移植期	出穂期	出穂後 15 日		出穂後 30 日穂重		成熟期	
	月/日	月/日	穂数 /m ²	籾数 /m ²	地点数	g/m ²	地点数	月/日
県	6/8(+2)	8/16(+3)	397(104)	31,645(105)	12/15	682(97)	10/15	9/26(+5)
中 部	6/17(+2)	8/23(+3)	359(94)	30,224(106)	4/4	605(89)	2/4	9/30(+5)
西 部	6/17(+7)	8/18(+2)	396(104)	33,827(105)	2/4	658(89)	1/4	9/17(+5)
北 部	5/22(±0)	8/7(+1)	438(111)	27,915(105)	4/4	736(108)	4/4	9/19(-3)
東 部	6/18(+2)	8/20(+6)	375(102)	33,024(105)	2/3	754(99)	3/3	10/5(+14)
早期・早植	6/1(+4)	8/10(+3)	404(104)	28,296(102)	8/10	665(95)	9/10	9/25(+5)
普通期	6/21(-1)	8/29(+1)	409(112)	37,140(114)	4/5	717(100)	1/5	10/11(+5)

注 1) 県、地区、作期別の平均値はいずれも算術平均とした。

2) 移植期、出穂期、成熟期欄の（ ）内の「－」は早い、「＋」は遅いを示す。

3) 10 月 15 日現在で調査時期となったほ場のみで、地点数は〔調査か所／設置か所数〕を示す。

4) 早期・早植：6 月 15 日以前の田植。普通期：6 月 16 日以降の田植。

(4) 作柄のまとめ（表 2）

各地域の作柄は、中部地域で「やや不良～並」、西部地域で「並」、北部地域で「やや不良～並」、東部地域で「やや不良～並」であり、県全体では「やや不良～並」が見込まれる。

表2 地帯別作柄概況 () 内は農畜産課・地域農業課

地域別	作柄	作 柄 概 況
中 部 (中部) (渋川) (伊勢崎)	やや 不良 ～ 並	・早植栽培：収穫終了。出穂後の長雨・日照不足が続いたため、成熟期は平年より3～7日程度遅れた。コシヒカリで降雨による部分倒伏が散見された。高温による白未熟粒はほとんど見られないが、青未熟粒が多い。 ・普通期栽培：黄熟期～成熟期。成熟期は平年より3～5日程度遅れた。粳いもち、紋枯病、内穎褐変病の発生が平年よりやや多い。
西 部 (西部) (藤岡) (富岡)	並	・早植栽培：収穫期。成熟期は平年より2～5日程度遅れた。白未熟粒の発生は少ない。収量は地域により差はあるが平年並～やや少ない見込み。 ・普通期栽培：黄熟期～収穫期。成熟期は平年より3～7日程度遅れた。穂いもちが平年より多く、倒伏も平年より多い。一部ほ場では紋枯病、もみ枯細菌病がやや多い。
北 部 (吾妻) (利根 沼田)	やや 不良 ～ 並	・早植栽培：収穫終了。成熟期は平年より5日程度遅れた地域がある一方で3～7日程度早まった地域もある。9月以降の日照不足と長雨の影響により青未熟粒が発生し、収穫遅れによる胴割粒や穂発芽も見られた。いもち病、内穎褐変病の発生は平年並であるが収量は平年並～やや少ない見込み。
東 部 (東部) (桐生) (館林)	やや 不良 ～ 並	・早期栽培：収穫終了。成熟期は平年より2日遅れた。収量は平年並～やや多いが、倒伏による穂発芽、青未熟粒が発生し品質は平年よりやや劣る。 ・早植栽培：収穫期～収穫終了。成熟期は平年より5～7日程度遅れた。収量は平年並であるが、倒伏による穂発芽、青未熟粒が発生し品質は平年よりやや劣る。一部地域ではいもち病が散見される。 ・普通期栽培：黄熟期～収穫期。成熟期は平年より5～7日程度遅れている。収量は平年並～やや少なくなる見込み。日照不足と長雨の影響による青未熟粒の発生が多い。今後は収穫の遅れによる胴割粒、着色粒の発生が懸念される。

3 技術対策

- (1) 登熟状況や気象状況に留意し、刈り遅れのないよう収穫を行う。適期の判定は、出穂後の積算気温、帯緑色籾歩合、籾水分などにより総合的に行う。
- (2) 倒伏した場合は、速やかに排水し、成熟状況を見て早めに収穫する。収穫期に穂発芽等が認められる部分は可能な限り別収穫とし、品質低下を防止する。
- (3) 自脱型コンバインによる収穫作業は、籾の損傷軽減や作業能率向上のため、朝露が消えてから開始する。脱穀籾は含水量が高く変質しやすいので速やかに乾燥に移す。
- (4) 乾燥については、過乾燥・急速乾燥に留意して、乾燥機の毎時乾減率は0.8%以下とし、籾水分14.0～14.5%（玄米水分14.5～15.0%）に仕上げる。高水分籾の場合、急速乾燥は胴割粒を発生させるので、初期は通風のみで乾燥を行い、水分むらを解消してから穀温40℃以下の低温で乾燥を行う。さらに籾水分18%で一旦停止して半日程度貯留した後、再度乾燥を行うと胴割粒の発生をより抑制することができる。
- (5) 調製については、網目を1.8mm以上とし、整粒歩合80%以上を目標に仕上げる。選別機の処理能力以上の粗玄米を流さないよう丁寧に行い、整粒の確保を図る。丁寧な調製を行い、可能であれば色彩選別機を活用する。
- (6) イネ縞葉枯病・イネカメムシ対策および地球温暖化防止の観点から、収穫後は早めに耕起し、ひこばえを残さないようにするとともに、ワラの腐熟促進を図る。
- (7) 種子伝染性病害（ばか苗病、いもち病、もみ枯細菌病等）対策として次のことを徹底する。

ア 種子更新と比重選の実施

自家採種種子や登熟不良種子は保菌リスクが高まるため、種子更新と比重選を行う。

イ 資材消毒、種子消毒の適正な実施

化学農薬による種子消毒では、薬液温度に留意し（10℃以下にしない）、粃と薬液の容量比（1:1 以上）を守る。温湯消毒は微生物農薬との体系処理を行う。

ウ 作業場、育苗施設、本田周りの清掃

いもち病やばか苗病が発生したほ場の稲わら、粃がら、米ぬか等は感染源となるため、作業場、育苗施設や本田周りに放置しない。

エ 種子消毒・温湯消毒時、催芽～育苗時の温度管理の徹底

種子消毒や温湯消毒は適正な温度、時間で実施する。また、催芽、出芽時は 28℃を超えないようにし、育苗期も高温に注意する。

- (8) いもち病や紋枯病が多発する年次が多いため、本病が問題となっている地域では効果の高い箱施用剤を広域的に使用する。本田で発病が見られる場合は、早急に防除を行う。
- (9) 農薬等の使用履歴を適切に記帳・確認し、適正な生産管理を徹底する。

《参考資料》

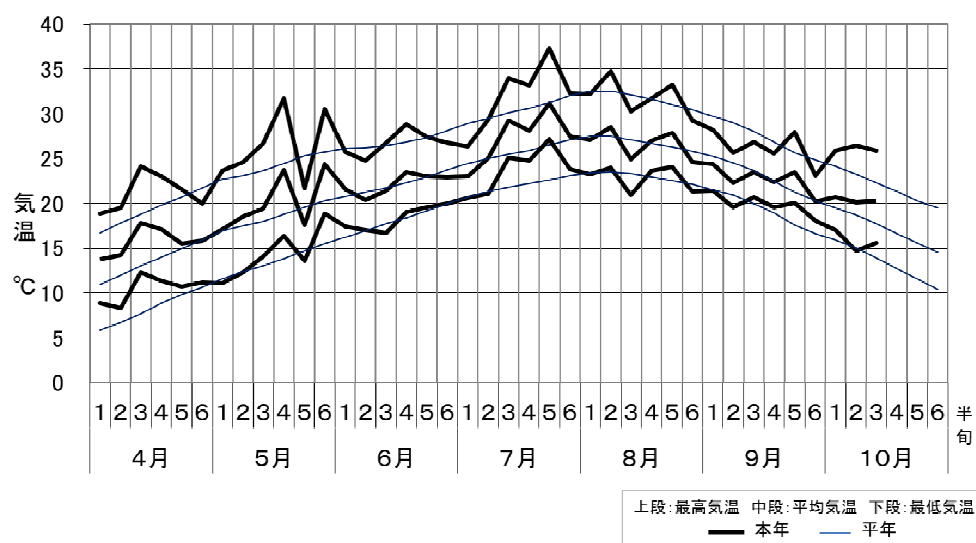


図 1 気温

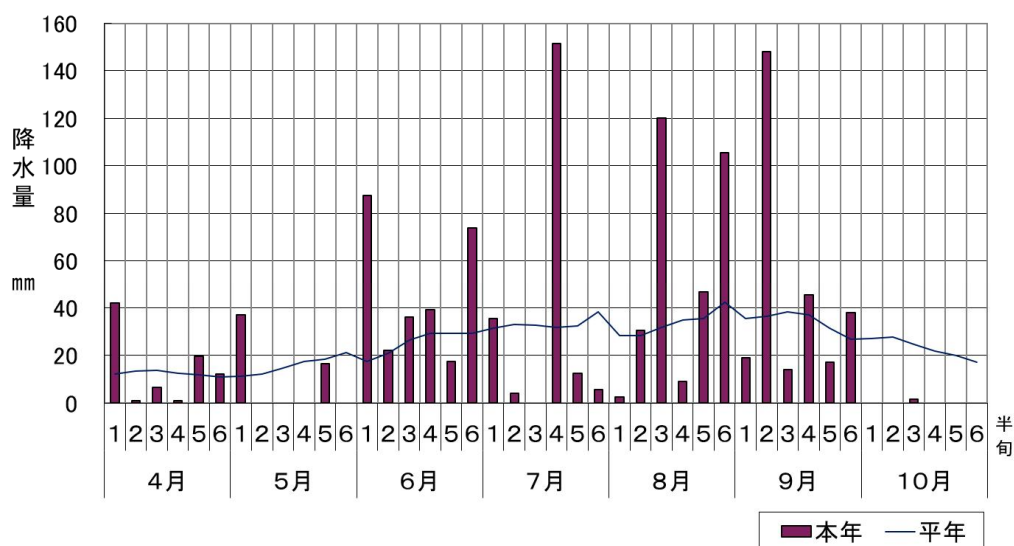


図 2 降水量

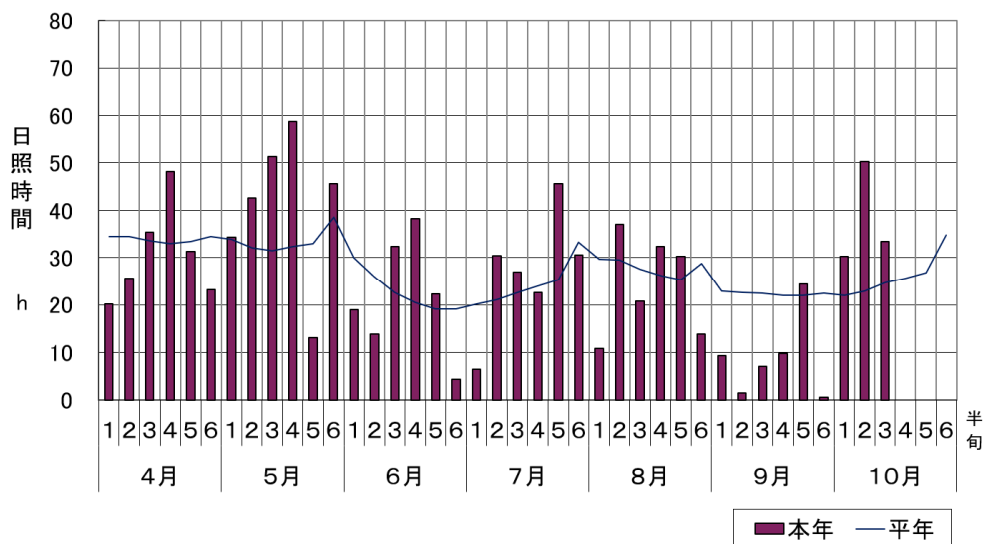


図 3 日照時間